

Title	白耳義・和蘭經濟史に関する近時の業績
Sub Title	Recent works on the Belgian and Dutch economic history
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾經濟学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.5 (1951. 5) ,p.244(66)- 249(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19510501-0066
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510501-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

白耳義・和蘭經濟史に關する
近時の業績

高村象平

最近約十年間に白耳義及び和蘭で刊行された兩國の經濟史の業績の主なものを J. Graybeek 氏が近著の *The Journal of Economic History*, Vol. 10, No. 2 (Nov. 1950) に報じてゐる。本稿においては更にそれを壓縮し、これ等の新しい著作によつていまままで採られて來た見解に訂正が加へられたものを中心としてその若干を掲げ、原著作の入手困難な今日の研究者の參考に資した。

先づ史料集を四つ。Sneller en Unger, *Bronnen tot de Geschiedenis van den Handel met Frankrijk* (1939); Unger, *Supplement* (1942)。これは次に擧げること同く和蘭の *Rijks Geschiedkundige Publicatien* (abbr. R.G.P.) の二冊であるが、七五三年以降の蘭佛貿易史料集であつて、一九三〇年に刊行された第一巻に續く第二巻及び補遺である。次に Snit, *Bronnen tot de Geschiedenis van den*

Handel met Engeland, Schotland en Ierland. Tweede deel, 1485-1585, eerste stuk, 1485-1558, (1942)。は 1150-1485 年の和蘭と英蘭・蘇蘭・愛蘭との通商史料集として一九二八年に刊行された第一巻二冊に續くもの。この第一巻と同様に中世商業史の研究に有用なること疑ひを容れない。第三に ピーター・ファン・ダムの和蘭東印度會社誌の第三巻が、第二巻 (一九二七-二九年刊)、第一巻 (一九三一-三三年刊) と同じ編纂者によつて刊行されてゐる。Pieter van Dam, *Beschrijvinge van de Oost-Indische Compagnie, uitgegeven door Stapel*. Derde boek, (1943)。である。植民史に關するもののみならず、貿易、航海についての多くの資料を載してゐる。と言を要さない。第四に國際物價史委員會の企劃による Posthumus, *Nederlandsche Prijsgeschiedenis, Eerste deel*, (1943)。これは一五八五-一九一四年の阿姆斯特ダム商品取引所に上場された商品價格と、一六〇九-一九一四年の爲替換算率とが表示されてゐる。

以上二つの總括的研究は例へば Van Houtte, *Schets van een economische Geschiedenis van België* (1943); Doelaerd, *L'Expansion économique belge au moyen-âge* (1946); Niemeyer, *De Wording van onze Volkshuishouding*. Hoofddijnen uit de economische Geschiedenis der Noordelijke

Nederlanden in de Middeleeuwen (1946) の如きが公刊されてゐるが、然し兩國の史家の關心は依然個別研究に向けられてをり、總括は寧ろあとの問題と做されてゐる傾向が強い。ではその個別研究として特記すべきものには如何なるものが發表されてゐるのか。以下これを取扱ふ時代を追つて掲げる。

注目に價するのは故ピレンヌ教授の所説に反對するものが尠くないことである。その一、二を擧げると、教授がその著モハメットとシャルルマーニュに於いて、回教徒による地中海南岸征服が東西兩洋の通商關係を遮断しここに歐羅巴には封鎖的莊園經濟の長い時期が訪れたと説いたことは周知の事實に屬する。これに對して巖に、第九、十世紀に商人階級が存在したこと、絹の輸入は中世初期になくなつてはゐないことを以て反對を唱へた Sabbe 氏は再び筆硯を新たに於て、回教徒による埃及征服後七、八十年間西歐においてパピルスは依然使用されてゐた事實を擧げ、更にメロヴィング王朝が羊皮紙を使用したのは、ピレンヌ教授のいふやうにパピルスの不足によるのではなく、認證に印璽が再び用ゐられるやうになつたからであると論じ (Papyrus et parchemin au haut moyen âge, *Miscellanea historica in honorem Leonis van der Essen* (1947), I.)。その所説を強化してゐる。次にピレンヌ教授は、第九世紀のフランドルにはその南部地方を除いて都市がなかつたと主張したのであるが、これを對して反對論が現はれてゐる。

白耳義・和蘭經濟史に關する近時の業績

即ち Blockmans 氏は第八世紀末にガンの聖パイツォン修道院の近傍に經濟的聚住が始まつてゐること、但しこれは八五一年にノルマン人によつて荒廢せしめられたが、同世紀末には聖パイター修道院領内に第二の聚落が發生してゐることを以て (Les deux 'portus' successifs de Gand, *Revue du nord* (abbr. R.N.), XXVI, 0943) その反證としてゐる。

第十一世紀のフランドルに多數の都市が出現したのは商業路の創設と關聯すると説くのが Dhondt 氏である (Développement urbain et initiative comitale en Flandre au XIe siècle, R.N., XXX, 1948)。氏によればこの商業路は、シヘルト河沿岸の諸都市とカロルローマ期に既に都市を有した地方とを結ぶものであつた。更に同氏は、フランドル伯が領内に商業を盛ならしめんと欲し、そのイニシアチヴによつてトルト、イーブル、メッシネ、リュ等の大市が創始されたと説いてゐる。都市の起源乃至その發達に關する研究としては、その他に Niemeyer 氏がその著書 *デルフト史* (Delft en Delfland, 1940) に於いて、同市の最も古い核心をなしたのは數箇の農圃より成る伯の宮庭であつて、殆んど經濟的價値のない一村落到過ぎなかつたが、一二四六年に都市特許狀が賦與されて以來周邊の農業地帯の經濟的中心となつたことを述べてゐる。又ロモール・ライン河間に在る三十五の中世都市の發展をテーマとした Ganshof 氏の著書 *Over stadsontwikkeling tusschen*

六七 (二四五)

Loire en Rijn gedurende de Middeleeuwen. 1941. Tweede oplaag. 1944.) それ等の都市がローマ起源の核心(civitas, castrum)乃至ローマ以後の起源の核心(王宮, palatium, 伯の castrum, 司教の居所, 防備を施した修道院)の周圍に發生したものであることを舉證し、第九世紀以降これ等の核心の近くに商業的新定住地が設けられたことを述べてゐる。この第九世紀に portus 及び vicus はすべてノルマン人によつて荒廢せしめられたのであつたが、早くも同世紀末及び次世紀初頭には舊聚落が商業の増大と共に再生し、portus, burgus, suburbium と呼ばれた都市的中心が形成されるに至り、爾後第十四世紀に至るまでに三回に亘つて市壁が繞らされて行つたのであつた。

個々の都市の研究はその數少なしとしない。經濟史上重要なそれ等に限つて研究の概要を窺ふならば、Marechal 氏はブルージュ取引所が第十五世紀に國際的性格を持つてゐたことを立證し、(Het international Karakter van de Brugse Handelsbeurs, Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden, I, 1946.) 嘗てエーレンベルク氏が近代的爲替取引はアンヴェルスにおいてそれも第十六世紀に至つて創始されたと述べた點を反駁してゐる。アンヴェルスについては Van Werveke 氏は第十四世紀に既に重要な商業中心となつてゐる、ブルージュと比肩する程であつたとし、(Brugge en Antwerpen-

n. Nederlandse Historiebladen (abbr. N.H.), III, 1947.) 氏は同市の經濟發展上、大市(一三一七—一三二四年以降)が重要であつたことを強調する。そして英國の羊毛ステーブルがアンヴェルスに數回設けられたこと、同市がフィレンツェとの間に廣汎な通商關係を維持したこと、ヴェネチアがアンヴェルスを北歐諸國への海運業の終點としたことを挙げ、ブラバンの經濟的政治的重要性の増大に基づくアンヴェルス最初の繁榮期は、フランドル伯ルイ・ド・マールによる同市攻略後第十四世紀後半に終りを告げたといつてゐる。これに續く時代——第十五世紀初頭以降のアンヴェルスの國際的市場への發展を探り上げたのが Van Houtte 氏であつた。(La Genèse du grand marché international d'Anvers vers la fin du moyen âge, Revue belge de philologie et d'histoire, XIX, 1940.) 氏はブルージュの没落がツワイン河口の土砂埋没に由るとする從來の見解を全く排してゐる。即ち船舶航行はスライスまでとなり、ノルヘン島を錨所とするに至つたが、然しブルージュは第十五世紀を通じて依然重要な商業中心地であつた。又アンヴェルスにおける外來者はブルージュのそれ等に比して遙かに自由に行動し得たとはいへない。然し第十四、五世紀の英國の經濟革命によつてフランドルへの羊毛輸出が減少すると共に英國毛織物は益々ブラバンに輸出されるに至つた。そしてその毛織物はケルン經由で中獨やプロイセンに送られたのであつた。ケ

ルンの英蘭毛織物輸入商人はこれを南獨や北伊にも送り、逆に後者からはブラバンの諸市場へ綿織物や香料を供給した。要するにアンヴェルスが英蘭貿易商人とケルン商人との重要な接觸地點となり南獨商人と葡萄牙商人との交會地點ともなつたために、第十六世紀における南獨の銅と葡萄牙植民地の香料との大量取引の基礎が築かれたのであつた。更に Michelsen 氏は第十七、八世紀のアンヴェルスを採り上げ、(Het Kapitalisme te Antwerpen in de XVIIe en XVIIIe Eeuwen, N.H., II, 1939.) 第十七世紀においても同市は依然國際金融市場であつたこと、美術及び奢侈工業が甚だ盛であつたこと、西班牙領植民地との貿易にかなり参加してゐたこと、その取引の範圍からみてアンステルダム、ロッテルダム、パリには劣つたものの第十八世紀に至つてもアンヴェルスは重要資本市場であつたこと、當時の投資の新形態は公債への應募と株式會社への参加であつたことを述べてゐる。多額の資金が海外に投ぜられ、工業は組合的性格を維持してゐたが、貿易は資本家的組織の下に營なされてゐたのであつた。

アンステルダム市については Brugmans 氏の舊著が増訂 (Opkomst en Bloet van Amsterdam. Tweede oplaag, 1944.) された外、Kertner 氏は同市の商業勃興に關する研究 (Handel en Scheepvaart van Amsterdam in de vijftiende eeuw, 1946.) を進め、同市の據頭を資した一因で、第十四世

白耳義・和蘭經濟史に關する近時の業績

紀以降における和蘭を貫流する内水航行路を擧げてゐる。氏によれば、一四四〇年頃同市都市貴族の四割は商人乃至船舶業者であり、一五〇〇年頃同市の船舶はズント海峡を通過する船舶の三六%を占めてゐた。尚 Sneller 氏のロッテルダム經濟史に關する論文集が刊行されてゐる (Rotterdams Bedrijfsleven in het Verleden, 1940.)

工業史關係の業績に移ると、先づ注目すべきものは Posthumus 氏のフランドル毛織物工業史第一、第二卷である (De Geschiedenis van de Leidische Lakenindustrie—De Nieuwe Tijd, 1939.) 周知の如くこの書の第一卷が刊行されたのは一九〇八年であつて、中世後期のライデン市を繁榮せしめた毛織物工業の跡を第十六世紀まで辿つたものであるが、右の第二、三卷はその後を承けて第十八世紀に至る斯業の第二次繁榮期を取扱つてゐる。この繁榮の基因は氏によれば、新生産技術を携へて第十六世紀末に同市に定着したフランドル移民であつた。同市は西歐における重要工業都市の一つとなつたが、毛織物工業の各部門は組合的基礎の上に謂はば中世的に組織されてゐたのであつたといふ。次に白耳義における亜麻布工業は從來未開拓の研究分野であつたが、この間隙は Sabbe 氏によつて充された (De Belgische Vlasnijverheid. Eerste deel, De Zuidnederlandse Vlasnijverheid tot het Verdrag van Utrecht (1713), 1943; Histoire de l'industrie linière en Bel-

sigue, 1945)。この亜麻工業は領土的起源のものであつて都市並びに農村において營なまれて来たが、第十二、十三世紀に至り先づエイノーにおいて、後にフランドル及びブラバントにおいて、交易に附される規模のものになる。そして諸都市における毛織物工業が衰退した後、亜麻工業は農村の「新織物業」と相並んで最も重要な織物工業部門となつたのであつた。

上掲の Van Werveke 氏は中世フランドル都市織物業における商人の雇主の役割と純粹な工業家の役割とを描いてゐる (De Koopman-Orderneer en de Orderneer in de Vlaamsche Lakenijverheid van de Middeleeuwen, 1946)。前者は工業支配人と遠隔地商人とを兼ね、羊毛を輸入し毛織物を輸出したが、第十三世紀の對英貿易の衰退と第十四世紀初頭の都市革命によつてこの型の人々は没落する。後者の純粹な工業企業家も亦第十四世紀には、半製毛織物を買入れてこれを仕上げ且つ染色せしめる商人や中間的代理人によつて、とつて代られるに至るのである。尚故 Laurent 氏はイッブル市の毛織物生産のカーブは一三四四年まで上昇を続けその後著しく下降したと説いたのであつたが Van Werveke 氏はこれを訂正し、第十四世紀三十年代に大なる後退があつた後は同世紀を通じて生産は殆んど同一水準を維持したことを明らかにしてゐる (De Omvang van de Ieperse Lakenproductie in de veertiende Eeuw, 1947)。Doelhaerd 氏の第十三、十四世紀における

アルプス以北の西歐諸國とチェノアの通商關係についての三卷の著書 Les relations commerciales entre Gènes, la Belgique et l'Outrenont d'après les archives notariales génoises aux XIIIe et XIVe siècles, 1941) もフランドル毛織物工業の販路を採り上げてゐる。チェノアの市の經濟は大約一二五〇年まで外國商人——そのなかには多數のフランドル人がゐた——によつて支配されてゐたが、シャムパーニュの大都市の開始と共にフランドル商人は次第にチェノアに赴むことになくなり他方チェノア商人の北方に赴む者多きを加へた。然し第十三世紀末にチェノアの商船がフランドルや英蘭に航海し始めるに至つて、シャムパーニュ大都市の重要さは失なはれて行く。フランドル毛織物取引はこの第十三世紀の間にチェノアを他の伊太利諸都市の擔當するところとなる。そして次世紀においては伊太利諸都市は夫々毛織物生産を開始しここにフランドル毛織物の輸入は減少するに至つたのであつた。

織物以外の工業製品については Sneller 氏のロッテルダムにおける石炭貿易史 (Geschiedenis van den Steenkolenhandel van Rotterdam, 1946) があり、船舶の底荷として用ゐられた和蘭煉瓦のバルト海地方、東西兩印度、北米への輸出についての Arntz 氏の研究がある (Export van Nederlandsche Baksteen in vroegere Eeuwen, Economisch-Historisch Jaarboek, XXIII, 1947)。又世界的に有名な和蘭球根の輸出の

歴史が Krelage 氏によつて發表されてゐるが (Drie Eeuwen Bloembollenexport, 1946)、同氏は和蘭における花卉の投機即ち一六三六——三十七年のチューリップ球根の投機及び一七二〇——三十七年のヒヤシンスの交易も考察してゐる (De Bloemenspeculatie in Nederland, 1942)。氏によればチューリップは第十六世紀末に土耳其から和蘭に輸入されたものであつた。最後に白耳義・和蘭兩國によつて特に重要な産業である漁業史の研究について附言する。即ち Degryse 氏は中世におけるフランドルの鱈漁業に關する研究を發表してゐる (Vlaanderens Haringbedrijf in de Middeleeuwen, 1944)。Kranenburg 氏は第十六——十八世紀の和蘭漁業とその漁獲物取引の組織とを問題にしてゐる (De Zeevisscherij van Holland in den Tijd der Republiek, 1946)。獨逸ハンザの研究に關聯してこの分野に關心を抱く筆者にとつて、兩著いづれも一讀したい意欲に驅られるのである。 (一九五一・三・二八稿)

紹介

ジョージ・W・ロビンズ

「商業の起源に關する諸見解」

(George W. Robbins)

“Notions about the Origin of Trading”

The Journal of Marketing January, 1947

片岡 一郎

商業の起源如何の問題は、經濟史家の側からも亦商業學者の間に於ても多年論究され、しかも尙未解決のまま今日に持越された問題の一つである。それは「原始時代の初期に對して、現代の商業の機能を追求し且つこれを明瞭ならしめんがために、そして同時に此の經濟行爲の基本的性格を發見しよう」とする意圖の下に提起された問題である。いまカリフォルニア大學のノズ氏は此の困難な問題を取扱ふに當り、從來歴史家に依つてロビとられて來た方法を「應批判的に省察し、問題の究明に當つて實證的資料によつて裏付けられた歴史的精密性を貫く事の不可能なるを指摘する。そしてかゝる方法を避けて謂わば社會學的な立場から解かうとしてゐる。

素々商業學の立場から此の問題が提起せられたのは「機能的